

ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』第11挿話(新訳と注解)-その一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 美彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8874

ジエイムズ・ジョイス

『ユリシーズ』 第二挿話（新訳と注解）——その一

小川美彦

凡例

* 印は将来において注解を付ける個所を示す。

割注に「訳」とあるのは「訳者の注」の意味である。そしてそれは、

Weldon Thornton : Allusions in *Ulysses*. An Annotated List.

Don Gifford with Robert J. Seidman : Notes for Joyce, An Annotation of James Joyce's *Ulysses*.

以上二冊の注釈書の注の訂正および一部加筆、もしくは新しく書き加えた割注であることを示す。

割注に、例えば 23、2—46 とあるのは、それぞれ第二挿話その一、その二の参照すべきページ数を表わしている。

略字として Ir = Ireland D = Dublin B = Bloom M = Molly S = Stephen を用いた。

聖書よりの引用や言及は原則として Douay Version の章節による。また聖書からの引用句の訳文は英国聖書協会の文語訳を用いたが、一部訳者が手を加えたところもある。

アイルランドの人名、地名の発音については、すでに英語化したものは英語読みにした。

ブロンズとゴールドとがならんで、行列の馬蹄、鋼響を聞いていた〔161、164参照〕。
ぶれれ、れれれ〔163〕。

爪くず、親指の堅くなった爪の表面から爪くずを削り取りながら、爪くず〔168〕。
そんなことを！ そしてゴールドはもつと顔を赤らめた〔同上参照〕。

かすれた横笛のような音が一度鳴った〔170参照〕。

フルー！^{フルー}「花が咲いている」〔同上〕。

「ゴールドのいく重にも巻きあげた髪〔167参照〕」。

サテンを着た、サテンの乳房〔2—110〕のうえて跳ねあがる薔薇の花〔167参照〕、『カステイルの薔薇』〔175〕。

声をふるわせて、声をふるわせて歌った、アイ「ドロウリス」〔170〕。

ばあ！ ここだあれ？ ……ゴールドにばあ〔171参照〕。

チリンと、憐れみの心にひたるブロンズに応えた〔173参照〕。

と、澄んだ、ながく響く、振動するひとつの呼びかけの音。ながくひびいて消えそうな呼びかけの音〔174～175参照〕。

誘い〔175〕。やさしい言葉。ねえ、おむきよ〔同上〕、「星影は消えゆきて」〔同上〕。鳥の鳴き声のように応えを奏でる音
〔175参照〕。おお、薔薇よ！ カステイル。「夜はしらじらと明けそねぬ」〔175〕。

二輪馬車はチャリン、チャリン、足なみ軽く走った、チャリン、チャリンと〔171参照〕。

硬貨はかちんと音をたてた〔177〕。時計がボーンと鳴った〔178〕。

告白〔179〕。鳴らせ〔同上〕。「いかで」〔同上〕。ガーターの反撥力〔180参照〕。「なれと別れえん」〔179〕。パチッ。鐘を〔同

上〕！ 腿が、パチッ〔180〕。告白。ほてった〔同上参照〕。「恋人よ、さらば！」〔180〕。

チャリン、チャリン〔182〕。ブルー〔174〕。

すさまじいピアノの轟音がどろきわたった〔186参照〕。「恋に燃ゆるとき」〔186〕。戦いだ！ 戦いだよ！〔同上〕。鼓膜〔187〕。

帆だ！ 波にヴェールをただよわせて〔189参照〕。

「おしまい」〔191〕。うたつぐみがフルートの音を響かせて〔同上〕。「もうなにもかもおしまいだ」〔同上〕。

息子が。む、息子が〔186〕。

彼「はじめて目のあたりにせしとき」〔2—85〕。ああ〔2—86〕！

ゆたかな〔2—87〕重ねもち〔同上〕。ゆたかな動悸〔同上〕。

声を震わせて歌っていた〔2—88〕。おお、誘惑〔2—89参照〕！ 魅惑的に〔2—89〕。

「マーサー！」〔2—89〕。「帰りきたれー」〔同上〕。

ぱちぱち。ぱちぱち。ぱちぱち〔2—90〕。

いやまったく、彼はこれ、までぜつたい、に聞いたことはなかった〔2—91〕。

つんぼの禿頭のパットが吸取紙をもってきた、もち上げた、ナイフを〔2—94参照〕。

月光の降りそそぐ夜の鳩の声、遠くに、遠くに〔2—95参照〕。

とつてももの哀しい〔2—97〕。追伸〔同上〕。とてもさびしく〔同上〕「咲き」*。

聞いてみて〔2—99〕！

いっばい棘のある、螺旋状にまいた冷いさざえ〔同上参照〕。いうことをきかないのかい〔2—96〕？ ひとりひとりが、そして相手に、ざわめきとうちにこもった轟き〔2—100参照〕。

真珠〔2—102〕、彼女が〔同上〕。リストの『狂詩曲』〔同上〕。シェウウ〔2—102 参照〕。信じないのかね〔2—93 参照〕？

いなかった、やはり、やはり、信じて、リドリディ〔2—93〕。まらと、たかと〔2—109〕。

黒鍵〔2—103〕。ずしんと響く〔同上〕。ベン、それを、さ、ひとつ〔同上〕。

客が待っているあいだじっと待っている。へ、へ。待っているあいだはじっと待っているんだ、へ〔2—99〕。だが待て〔2—103〕！

地球の暗い中心で腹にひびく音。深く埋蔵された鉱石〔同上〕。

「じゃの御にゃ」〔2—105 参照〕。彼は牧師なり。

全員が死んだ。全員が斃れた〔2—106〕。

か細い、彼女のうち震える、羊歯の葉先のような乙女の髪の毛〔2—109 参照〕。

「アーメン」。彼は逆上して歯ぎしりした〔2—109〕。

うえに。したに、うえに。頭を突き出した、つめたい棒〔2—109 参照〕。

ブロンズリディアとマイナゴールドとがならんで〔2—114 参照〕。

ブロンズのそばに、ゴールドのそばにならんで、海緑色の影につつまれて〔183 参照〕。ブルーム。ブルーム君〔170〕。

男がとんとん叩いた、男がこつこつ叩いた、たかで、まらで〔2—102 参照〕。

若者のために祈ってください！ 祈ってください、「善民よ」〔2—110〕！

中風やみみたいな不恰好な指をばちばち鳴らしながら〔2—111〕。

ふとっちよのペナメン。ふとっちよのペンメン〔同上〕。

「夏の名残りの薔薇」〔2—112〕カステール〔158〕「おくれて咲き」〔2—112〕、ブルーム〔2—114〕、とってももの哀しい〔2—97〕、「ひとり」〔2—114〕。

プー！ わずかなその風がちよっぴりパイプを吹き鳴らした〔2—114〕。

「憂国の土」〔2—117〕、リド、カー、カウ、デイ、そしてドラ〔同上参照〕。そうよ、そうよ〔2—118〕。「諸君のごとき」〔2—117〕。チャリンとともにチリンをあげん〔同上〕。

スー！ ウー〔2—118〕！

どこから？ ブロンズは近くから。どこから？ ゴールドは遠くから〔164、2—117参照〕。どこから？ 蹄の音が〔164〕。プルプル。ガラアア。ガララガラ〔2—118参照〕。

「そのときこそ、そのときまではぜったいに」〔2—118〕。「わがほ」プルプスス「ひめい」〔同上〕。プスル「かかれれ」〔同上〕。「終り」〔同上〕。

さあ、始めよう！

ブロンズとゴールド、ミス・ダウスの頭とミス・ケネデイの頭とがならんで、オーモンド・バー〔リフイ川北岸の、アバ・オーモン
ド河堤通り八号に現在もあるO・
ホテル内のラウンジバー。当時の
経営者はミセス・デ・マッシュ説〕の半目隠し越しに、総督の馬車行列が蹄鉄の音を響かせながら通っていくのを聞いていた〔158参照〕。

——あのかたが夫人なの？ とミス・ケネデイは訊ねた。

ミス・ダウスは、そうよ、といった、闇下とならんで腰かけている、明るいグレイのそばのナイル・グリーン Dres のドレスよ。

——絶妙なコントラスト〔ウエイトレスなどがふだん使
わないよそゆきの言葉〕だわ、とミス・ケネデイはいった。

そのとき、胸をはずませてミス・ダウスが急ぎこんでいった。

——あのシルクハットをかぶった男をみなさいよ。

——どのひと？ どこ？ とゴールドはもつと急ぎこんで訊ねた。

——二番目の馬車、とミス・ダウスは、日光に映える濡れた〔活発なお喋り〕唇をほころばせながらいった。こつちを見てるわ。お願い、もつとよく見てくるから。

彼女はさつと、ブロンズ、部屋のいちばん端まで走っていき、はずんだ息で円く曇った窓ガラスに顔をびったり押しつけた。

濡れた唇がくすくす笑いながらいった。

——あのひと、あんなに首を曲げてこつちを見るわ。

彼女〔ミス・ダウス〕は笑いながらいった。

——まあ、呆れた！ 男つてどこまでお馬鹿さんなんでしょう。

悲しげに。

ミス・ケネディは一本のほつれ髪を耳のうしろに巻きつけながら、窓辺をゆっくり悲しげに離れた。悲しげにゆっくり歩きながら、日陰になったゴールドの彼女は一本の髪の毛を巻きあげ、巻きつけた。悲しげに彼女はゆっくり歩きながら、形のよい耳のうしろにゴールドの髪を巻きつけた。

——あんなひとただけがいつも楽しい生活をしてるんだわ、と、そのとき彼女は悲しげにいった。

ひとりの男。

ブルーどのひとが胸に『邪淫の蜜』〔第一〇挿話参照〕を抱えて、パイプ類を並べたムラング商店〔SD市南緯のウェリントン河堤通りが、ファウンテンと交わる角から六軒目〕

号。寶石、パイプ輸入商
ダニエル・M・経営訳」の
目三五号。寶石、古美術
商バーナド・W・経営訳」の
ヤロル商店（ワイン商店から引返し、ムラング商店を通りすぎて三軒目）の
前を通りすぎた。

雜役ボーイが彼女たちのところへ、バーの彼女たちのところへ、彼女たちウエイトレスのところへ（雜役ボーイふぜいが、という気持の表現）やつてきた。自分の方を振りむこうともしない彼女たちにむかって、カウンターのの上に茶盆をがちゃんと置くと、茶碗がぶつかつてちやらちやら鳴った。そして

——ほら、お茶だぞ、と彼はいった。

ミス・ケネディはわざと上品ぶつた手つきで茶盆を、床（ま）にさかさに置いてある下の炭酸水のびんの空箱の上に、低く人目につかないように移した。

——なにをやつてんだい？ と下品に大声で雜役ボーイが訊ねた。

——あててごらんよ、とミス・ダウスは覗いていた窓際から離れながらやり返した。

——彼氏だろう？

ブロンズは頭ごなしにきめつけていった。

——こんどそんな高慢無礼な口のききかたをしたら、ミセズ・ド・マッシにいいつけてやるわよ。

——ぶれれ、れれれ（188）、と雜役ボーイは鼻息あらくやり返した、おどかさされて、来たときと同じようにぶりぶりひき返しながら。

ブルーム。

ミス・ダウスは眉をひそめて、胸の花を見やりながらいった。

——まったく癩かにさわるったらないわ、あの小僧。こんどあんなことをいったら、思いきり耳をつねってやるから。

淑女ぶったところは絶妙せつめうなコントラスト〔161〕〔ここではミス・ダウス。とミス・ケネディ〔訳〕。〕

——ほっときなさいよ、とミス・ケネディはたしなめていった。

彼女は茶碗にお茶をついだ、それからまたポットにお茶をもどした。ふたりはカウンターの岩の陰に身をかくして、さかさにした空箱の足台に腰をおろして待ちながら、お茶がよく出るのを待っていた。ふたりは黒サテンのブラウスを、それぞれ一ヤールニシリング九ペンスと、ニシリング七ペンスの生地なまのブラウスをこすって皺しわをのびしながら、お茶がよく出るのを待っていた。

そう、近くからブロンズと、遠くからゴールドとが〔同上参照〕並んで、近くから蹄鉄の響き、遠くから蹄の音が鳴りひびくのを聞いた、そしてさらに聞いた、蹄鉄のひびき、蹄はがの音、鋼はがの響き〔158、161参照〕。

——こんなに焼けてみっともないかしら？

ミス・ブロンズはブラウスの襟もとをあけてみせた。

——それほどでもないわ、とミス・ケネディはいった。すぐに小麦色になるわよ。礪砂れいさを桜ローレル水〔桜ローレルは薔薇科に属は青酸を含む。民間化粧水〔訳〕〕に溶かして使ってみた？

ミス・ダウスは中腰になって、バーの金文字入り飾り鏡に映った自分の皮膚の色を横目で眺めた、鏡のなかにはライン白葡萄酒とポルドー赤葡萄酒用のそれぞれのグラスがちらちら光り、その真中に貝殻〔海水浴から土産〔訳〕〕がひとつ光っていた。

——それに、手のほうがもっとひどいのよ、と彼女はいった。

——グリセリンをつけてみたら、とミス・ケネディは勧めた。

鏡のなかの頸と手に別れを告げて、ミス・ダウスは

——そんなものをつけてもかぶれるだけだわ、と答えてまた腰をおろした。せんだつてポイド商会(D市北岸、メアリス・ストリート
油、色薬販売、メチール・アルコール製造〔記〕)のあの老ぼれじいさんに肌につける薬の調合を頼んだのよ。

ミス・ケネディはやつとよく出たお茶をつぎながら、顔をしかめて哀願した。

——ねえ、二度とあんな奴のことなんか口にしないで！

——まあ、おしまいまで聞きなさいよ、とミス・ダウスは懇願した。

砂糖を入れたお茶に、ミス・ケネディはミルクを入れると、小指で両方の耳に栓をした。

——いやよ、話さないで、と彼女は叫んだ。

——聞きたくないわ、とまた彼女は叫んだ。

——ところで、ブルーム〔163〕は？

ミス・ダウスは老ぼれじいさんの鼻にかかった口調をまねてぶつぶついった。

——あなたのどこにつけなさるのかね、だつてさ。

ミス・ケネディは話をきき、自分も喋るために耳の栓をとった、だが口を開いたものの、またしても哀願に終わった。

——あんな奴のことなんかもうたくさん、胸糞がわるくなるわ。いやらしいじい！ ほら、あのエインシエント音楽堂の晩のことを覚えてるでしょ。

彼女はまずそうに自分のお茶を、熱いお茶を啜った、ひと啜り、砂糖入りのお茶を啜った。

——ほら、こんな恰好をしてさ、とミス・ダウスはブロンズの頭を四分の三ほどかき上げて、小鼻をぴくぴく動かしながらいった。フンガ！ フンガ！

つんざくような、かん高い笑い声がミス・ケネディの喉のどからほとばしり出た。ミス・ダウスは獲物を探す猟犬の鼻みたい

に、鼻の孔をびくびくふくらませたり、へこませたりして、ぶれれ〔同上〕と震わせた。

——あら！ いやだ、とミス・ケネディは叫んだ。あのじ、じ、い、のどんぐり目が忘れられる？

ミス・ダウスは太いブロンズ声をたてて、笑いながら大声で口をさしはさんだ。

——だから、あんたの目は藪にらみだというのさ！

ブルーどのひと〔162〕の黒い眼はエアロン・フィガトナ〔キヤロル商店〔163参照〕からさらに西へ四軒目〔二六号〕のユダヤ人の宝石商〔記〕〕の名前を読んだ。なぜいつもフィ

ギヤザと読みちがえるのかな？ フィッゲ 無花果を集める〔くを集める〕は女性陰部の陰語。したがって「いちじ」の連想のようだ。それからプロスパ・

ロレ〔フィガトナ商店からさらに西に、ウェリントン河津通りが二一五号。ロレ〔タス・ストリートと交わる西角（二三号）。 硝子製造業者〔記〕〕というのはユグノー教徒の名前だ。聖像をならべたバツシ商店〔ロレ商店か

軒において西隣り（一八号）の、ジョウジフ・B・およびさらに西へ四軒目〕の前をブルームの黒い眼は通りすぎた。青い＊外衣の下から白い內衣をのぞ

かせて、「われに來れ」〔マタイ二八〔記〕〕。カトリック教徒は聖母を神、つまり女神だと信じている〔カトリックでは聖母は神ではなく、聖人であ

〔暗宗〕〕。今日みた女神たち〔国立博物館の。第九挿話参照〕。よく見れなかつた。あの男が話しかけたものだから。学生だつた。あとでディーダラ

スの息子さんといつしよに。あれがマリガンかも知れない。聖母像はどれもこれも美しい顔だちをしている。あの純白の内

衣の魅力にひかれて、道楽者まで教会へくるんだ。

通りすぎていった、彼の眼は。『邪淫の蜜』〔162〕。蜜は甘い。

邪淫の。

若々しい声が溶けあつて、ゴールドブロンズ声の激しくすくす笑いの渦になった、ダウスとケネディと、あんたの眼は

藪にらみだというのさ。ブロンズとくすくすゴールドは、ふたりとも若々しい頭をのけぞらせて思いきり笑い、あんたの眼

は、きやつきやつと、互に相手を指さしながらかん高いつんざくような声を挙げた。

ああ、ああと息をきらせ、溜め息をついて、ああ、ああと溜め息をつき、くたびれたあげく、ふたりの陽気な笑いはしず

まった。

ミス・ケネディはまたも茶碗に口をつけ、それを傾けてひと啜り飲み、それからくすくす笑った。ミス・ダウスはふたたび茶盆の上に身をかがめ、またも鼻をふくらまして、笑いで腫れぼったくなった眼をひょうきんにきよろつかせた。またもケニくすくすはいく重にも巻きあげた金髪〔158参照〕の頭をさげ、うしろにさしたべつここの櫛が見えるほど身をかがめて、口にふくんだお茶を吹き出し、お茶と笑いにむせながら、むせてせき込んで叫んだ。

——あらまあ、あの脂ぎったユダ公の眼！ あんな男と結婚するなんてまっぴらだわ、と彼女は叫んだ。それに、あんなちよび髭をはやしてさ〔ふたりは近付いてく〕るBに気付く訳！

ダウスは思いきり大きな笑い声を爆発させた、はちきれんばかりの女らしい、おかしさ、陽気さ、胸糞の悪さを思いきりこめた豊かな笑い声。

——あんな脂ぎったユダ公鼻と結婚するなんて！ と彼女は大声でいった。

かん高い笑い声に太い笑い声がつづき、つぎにブロンズ声のあとからゴールド声が互いに互いを爆発から爆発へと煽り立て煽り立て、転調しながら、ブロンズゴールド、ゴールドブロンズと、かん高い声太い声が、笑い声と笑い声との競演をくりひろげた。つづいてもう一度笑いの爆発。たしかに脂ぎった鼻だわ。くたびれ、息ぎれがして、ふたりのふらふらの、櫛で梳してつやつやした頭、ひとり編んだ髪をし、もうひとりはいく重にも巻きあげた髪をしたふたつの頭を、岩棚がわりのカウンター〔164〕にもたせかけた。ふたりとも顔をまっ赤にして（ああ！）、喘ぎ、汗ばみながら（ああ！）、すっかり息をきらして。

ブルームと、脂ぎいったユダ公のブルームと結婚する。

——あら！ とミス・ダウスは、薔薇の花〔163〕を眺めながら〔158参照〕溜め息まじりにいった。こんなに笑う

んじやなかつたわ。汗でびっしより。

——まあ、ミス・ダウス！ とミス・ケネディはたしなめた。そんなこと〔汗などという〕を口にして！

そしてもつと顔を赤らめ〔158参照〕（まあ、そんなことを——）、ゴールドがいつそうひき立つように髪が生え際まで赤くなつた。

脂ぎいったユダ公のブルームは、ぶらぶらとキヤントウエル商会〔ウェリントン河岸通りをさらに西に、エセックス橋寄りの角から六軒目一〕の前を、それからセピ商会〔キヤントウエル&マクドナルド商会からさらに西に三軒目八〕の色あざやかな聖母像の前を歩いていった。ナネティ

〔第七挿話参照〕の親父さん〔イタリヤ人の彫刻家、塑像製造業者ヒータ・C・父子商会〕は僕とおなじようにまいことを言つて、軒のきなみにあまいうものを売つて歩いたのだ。

宗教でも商売になる。あの広告のことで彼に会わなくちゃ。まず腹ごしらえだ〔第八挿話での食事は一時しのぎ。ここではおそい昼食〕。はらがへつた。まだ

だ。四時、とモリはいつてたからな。時間は止つてくれない。時計の針はどんどん廻つてゐる。急がなくちゃ。どこで食べ

るかな？ クラレンス・ホテル〔ウェリントン河岸通り六十七号〕にしようか、それともドルフィン・ホテル〔ウェリントン河岸通りのすぐ南の四五十八号。三四号店はホテルと食堂。四五十一号店はホテルと軽食バーを経営〕か。急がなくちゃ。「ラウルのために」〔163〕。食べよう。もし広告で五ギニ手に入つたら董

色の絹のペティコートを買つてやろう〔第八挿話参照〕。まだまだ。『邪淫の蜜』〔162〕。

顔の赤らみがしだいしだいに薄れ、ゴールドはもとの白さにもどつた。

彼女たちのいるバー〔163〕へミスタ・ディードラスがぶらりと入つてきた。爪くず、一方の親指の堅くなつた爪の表面から爪くずを削り取りながら。爪くず〔158〕。彼はぶらりと入つてきた。

——やあ、お帰り、ミス・ダウス。

彼は相手の女の手をにぎつた。彼女は休暇が楽しかつたかい？

——最高よ。

ロストレヴァ〔北Irダウソンのカーリングクラブ〕は天気はよかつたんだらうね、と彼はいつた。

—すばらしかつたわ、と彼女はいつた。このひどい肌の色を見てちようだい。一日中海岸で寝ころんでいたからよ。
ブロンズに焼けた白い肌。

—ずいぶん罪なことをしたもんだね、とミスタ・デーダラスは彼女に云いながら、やさしく相手の手を握りしめた。
かわいそうにお人好しの男どもを誘惑したりして。

黒サテン〔164〕のミス・ダウスは自分の腕をそつとひいた。

—まあ、呆れた、と彼女はいつた。あんたがお人好しだなんて。

ところが彼は。

—とんでもない、わしはお人好しなんだよ、と彼は感慨ぶかげにいつた。わしは生れたときにかにもお人好しな顔つきをしていたんで、お人好しのサイモンなんていう呼び名がつけられたんだ。

—あんた、きつとほんほんだったんだわ、とミス・ダウスは相手に応じた。ところで、今日のお薬は？

—そうだな、と彼は考えながらいつた、いよいよみつくるってもらおうか。お冷やとウイスキーを半グラスということにするかな。

チャリン〔ポイランが乗っている。軽快な馬車の音記〕。

—はい、大至急に、とミス・ダウスはふたつ返事で答えた。

大至急にしとやかに、キャントレル&コクリン会社の金文字の名前入り飾り鏡〔164〕の方に彼女は向いた。しとやかに彼女は小型のクリスタルグラスの樽から一定量の金色のウイスキーを出した。ミスタ・デーダラスはモーニングの裏のすそポケットから煙草入れの袋とパイプを取り出した。大至急彼女はグラスをカウンターのの上に置いた。男はパイプに二度息を

通し、かすれた横笛みたいな音をたてた〔158参照〕。

——ほんとにそうだ、と彼は感慨ぶかげにいった。わしはかねがねモー^{*}ン山脈を見にいきたいと思つていた。あそこの空気がきつとたいした強壯剤になるだろうな。しかし、待てば海路の日和あり、というからな。たしかに。たしかに。

たしかに。彼はひとつまみの髪の毛、ミス・ダウスの乙女の髪の毛、彼女の^{*}人魚の髪の毛を思わせる煙草をパイプの火皿につめ込んだ。爪くず〔168〕。ひとつまみ。感慨にふけり。黙つて。

だれもひと言もなにひとつ云わなかった。たしかに。

陽気にミス・ダウスは大コップを磨きながら、声をふるわせて歌つた。

——「おお」、アイ「ドロウリス、東海の女王よ!」〔158参照〕

——ミス^{*}タ・リドウエルは今日みえたかい?

そういつて、レネハンが入つてきた。自分の周りをレネハンはいつと見回した。ミス^{*}タ・ブルームはエセックス橋〔現在のグラタン橋。中心のオウコスル橋から上流へ二番目の橋で、オーモンド・ホテルはこのすぐ上流〔訳〕〕まできた。たしかに、ミス^{*}タ・ブルームはタシカニセックス橋を渡つた。マーサに手紙を書かなくちや〔第五、八挿〕。レター・ペーパーを買おう。デイリの店〔オーモンド・ホテルのすぐ下流のグラタン橋の北のたもと〕で。あそこ^{*}の女店員は親切だ。ブルーム。ブルーム君〔160〕。青い「ライ麦の花が咲いている」〔158参照〕。

——昼食どきにいらしてたわ、とミス・ダウスはいつた。

レネハンはそのへ近づいて行つた。

——ミス^{*}タ・ポイランが僕を探してたろう〔第一〇挿話で、四時にこのホテルで会いたいと言付けた〔訳〕〕?

彼はたずねた。彼女は答えた。

——ミス・ケネデイ、あたしが二階にいつてる間にミス^{*}タ・ポイランがおみえになつて?

彼女はたずねた。ケネデイのミス声が答えた、二杯目の茶碗〔167〕を持ち上げ、視線をページの上に落したまま。

——いいえ。おみえにならなかつたわ。

ミス視線のケネデイはレネハンに聞かれてはいたが、見られてはおらず、読みつづけた。彼のまるまるとした体は、サン
ドイッチの入った鐘形のガラス容器のまわりをまるく回った〔サントイッチの品定めをするためと、ケネデイの顔をのぞくため〔訳〕〕。

——ばあ！ ここにいるのはだあれ〔158参照〕？

ケネデイの視線は男の方を見むきもしなかつたが、それでも彼はしきりに誘いをかけた。句読点に注意して。書いてある
字だけを読みましよう、円いのはOで曲つたのはSです。

二輪馬車、足なみ軽く、チャリン〔169〕、チャリン〔158参照〕。

乙女らしいゴールの頭を伏せたまま彼女は読みつづけ、視線を上げようとしなかつた。知らん顔をしていることだ
わ。相手の男が朗読寓話を単調にもぐもぐ、暗誦口調で聞かせている間、彼女は知らん顔をしていた。

——き*つ—ね—が—こ—う—の—と—り—に—あ—い—ま—し—た—。き*つ—ね—は—こ—う—の—と—り—に—い—
—い—ま—し—た—。あ—な—た—は—わ—た—し—の—の—ど—に—く—ち—ば—し—を—い—れ—て—ほ—ね—を—ぬ
—い—て—く—れ—ま—せ—ん—か—？

男はもぐもぐ読んで聞かせたが、手ごたえはなかつた。ミス・ダウスは顔をそむけてお茶の方を見た。

彼は顔をそむけて、溜息まじりにいった。

——ああ、ああ！ やれやれ！

彼がミスタ・ディーダラスに挨拶すると、相手は軽くなずいた。

——高名な父親の高名な息子さんがよろしくといたしましたよ〔レネハンは第七種話でSに会い、いっ。〕
〔レネハンにミスターの酒場へ出かけた〔訳〕〕。

——はて、誰のことだい？ とミスタ・ディーダラスは訊ねた。

レネハンはいかにも上機嫌に両腕を上げた。誰？

——だれのことですって？ と彼は訊ねた。きまつてるじゃありませんか。あの青年詩人ステイヴンですよ。乾いた。

高名な父親ミスタ・ディーダラスは乾いた煙草を詰めたパイプ〔169〕を横においた。

——なるほど、と彼はいった。さしいよは誰のことを云っているのかわからなかつたよ。噂によると、せがれ伴はたいへんお上品なひとたちと交際しているそうだね。君は最近あつたのかね？

彼はあつた。

——現に今日、僕は息子さんと御神酒おみきを傾けてきたんですよ、とレネハンはいった。市内と市外のムーニの酒場で。彼は詩神が産気づいた〔『オセロ』21の「二八行の転用」〔訳〕〕お蔭でかねにあり付いたというのでね。

彼はお茶に濡れたブロンズの口もとに、聞きいつている口と眼にほほえみかけた。

——エリン〔Eの古の古〕のお歴々が息子さんのいうことを一心に聞いていたんですぜ。きざな教授のヒュー・マックヒュー〔第七挿話、参照〕、ダブリン随一の天才的な文筆家にして編集者〔マイルズ・クロ〕、それから雨がちな荒涼たる西部出身の『少年樂手』オマドン・バーク〔『ダブリン児たち』の「おふくら」にも「出る自由契約のジャーナリスト」〔訳〕〕というあの口調のいい名前〔けつして口調はよくないが、わごと皮肉っていったもの〕〔訳〕で知られている人物など。

ミスタ・ディーダラスはひと息いれてから、グラスをあげて、

——それはさぞかし愉快だつたらうな、と彼はいった、わかるな。

彼にはわかる。彼は飲んだ。遙かにあこがれのモーン山脈〔170〕を望むような眼差しで。彼はグラスを下においた。

彼の眼は社交室の入口の方に移った。

——ピアノの位置を変えたんだね。

——調律師が今日きたんです、とミス・ダウスは答えた、喫煙音楽会のために調律してもらったんです、だけど、あんなに絶妙に、「163」弾くひとあたしはじめてだわ。

——そうかい？

——そうよね、ミス・ケネディ？ 本格的なクラシックよね。それに、かわいそうに盲目めくらなの。きっとまだはたちにもなっていないわ。

——そうかい？ とミスタ・デーダラスはいった。

彼は飲みほすと、席を立った。

——あのひとの顔を見るのがとつてもつらくって、とミス・ダウスは気の毒そうにいった。

この罰当りの明きめくらめ 〔第一〇挿話で、この調律師が不注意な一通行人にむかって吐きかけた怒りの言葉（訳）〕

彼女の憐れみの心に応えて、食事客のベルが悲しげにチリンと鳴った〔158参照〕。バー〔168〕とダイニング・ルームの入口のところに禿頭のパットが現われた、気づかない顔のパットが現われた、オーモンドの給仕パットが現われた。ラーガ・ビール〔ドイツ原産の貯蔵ビール〕一本。大至急に〔169〕でなく、彼女はラーガ・ビールを渡した。

じりじりしないで、レネハンはじりじり、ポイランを待った、足なみ軽くチャリン、チャリンと二輪馬車〔171〕を走らせる伊達男を待った。

蓋を揚げて、彼（誰？）は棺（棺だって？）の中の斜めに張った三本一組の（ピアノか！）弦の列を凝視した。彼（女の）手を意味ありげに握りしめた〔169参照〕そのひと）は下の弱音ペダルを踏みながら、三つのキーを叩いて、部厚いハンマ

ー・フェルトの動きを見、ハンマー・ヘッドが弦を打つ音を聞いた。

クリーム色の模造皮紙一枚（予備一枚）、封筒二枚〔書籍セットの〕、僕がウィズダム・ヒーリ〔有責任会社ヒーリ商会の、当時〕の店

〔D〕市南岸の中心街デラム・ストリート二七三〇号の文房具製造、出版、石版印刷、製本業者ヒーリ商会〔訳〕にいたころ扱った商品、デイリの店〔170〕で思慮深いブルームは、ヘンリー・フラウア

〔B〕の恋文用〔偽名訳〕は買った。「あなたおうちでしあわせじゃないのね」〔浮気の相手マーサから〕？ 僕を慰めるための花〔花言葉の上からこれに〕

だが留針は愛〔情〕を裂く〔第八挿話ではじめて〕。何か意味がある、は〔な〕言葉。あれは雛菊だったかな？ 雛菊は純潔を表わ

す。うしろ指さされたことのない女は、ミサの後でひとに会う。大きにはばかりさまだ〔以上第五挿話での〕。思慮深いブルーム

はドアに貼つてあるポスターに眼を留めた、快い波に揺られて煙草を吸っているひとりの人魚。煙草は人魚印、舌ざわりは

天下一品。風になびく髪、恋に焦れて。ある男のために。「ラウルのために」〔168〕。彼がふと眼をあげると、遙かエセック

ス橋〔170〕の上を二輪馬車に乗ってくるはでな色の帽子が見えた。彼だ。まただ。これで三度目。偶然の一致。

ゴムタイヤをはずませて、二輪馬車は足なみ軽く、チャリン、チャリンと〔173〕エセックス橋からオーモンド河岸通り

〔161のオーモンド・パリの割注参照〕へと向つた。あとをつける。やってみるんだ。急げ。四時に〔168〕。もうすぐだ。出よう。

——二ペンスいただきます、と女店員〔170〕は思いきっていった。

——おやおや……うっかりしていて……どうも……

——はい、四ペンスのおつりです〔六ペンス銀貨を出。〕

四時、と彼女は。愛嬌よく女店員はブルーかれどのひと〔166参照〕にほほえみかけた。ブルー〔159〕、ほほ、さつ、去る。

ようなら。うぬぼれないことだ。だれにでもああするんだ。男には。

ねむそうに黙りこんで、ゴールドは開いた。ページの上に頭をさげていた〔171参照〕。

社交室〔172〕からひとつの呼びかけの音が聞こえてきた、ながく響いて消えた。それは調律師が持ってきた音叉で、彼が

忘れていったのをいまディーダラスが鳴らしたのだ。ふたたび呼びかけの音。手に持った音叉を彼はいままっすぐ立てた、それでいま振動音が響いてきたのだ。聞こえるだろう？ 振動する音叉のぶんぶん鳴る音は、しだいしだいに澄みわたり、しだいしだいに弱くなつていった。前よりもいっそうながくひびいて消えそうな呼びかけの音〔158参照〕。

パットは食事客の王冠栓のビールの代金をとりついで。そして立ち去る前に、盆にのせたジョッキと王冠栓のびん越しに、禿頭の、気づかい顔の〔173〕彼はミス・ダウスに耳うちした。

——「星影は消えゆきて……」

社交室からピアノがうたう歌のメロディーが聞こえてきた。

——「……夜はしらじらと明けそめぬ」

鋭敏な指のタッチに応えて舞い上つた最高音部の十二の音が鳥の鳴き声のように陽気なメロディーを奏でた。陽気ないろいろな調子の音がすべて閃き、結び合い、全体がアルペッジョに演奏されて、露けき朝と、青春と、恋人との別れと、人生の朝、恋人の朝の調べを歌えと呼びかけた。

——「……玉なる露に輝きて」

レネハン〔170〕は唇をとがらせて、カウンター越しに低い誘いの口笛を吹いた。

——ねえ、こつちをおむきよ、と彼はいった、『カスティールの薔薇』〔158〕よ〔同上参照〕。

二輪馬車は足なみ軽く、チャリン、チャリンと〔174〕歩道のふち石にそって走り、そして止まった。

彼女は立上りながら本を閉じた、『カスティールの薔薇』が、くよくよと、切ない思いにかられ、興奮さめやらぬ様子で立ち上った。

——女の方でころんだのかい、それともころばされたのかい？ と男は彼女に訊ねた。

相手はつつけんどんに答えていった。

——「聞かぬが花」なのよ。

淑女でもないのに淑女ぶって「164」。

ブレイジズ・ボイランのいきな赤靴は、大股で歩くたびにバー「173」の床の上できゅっきゅつ鳴った。そう、近くからゴルドと、遠くからブロンズとが並んで聞いた「164」。レネハンはその靴音をききつけ、彼と知って呼びかけた、

——「見よ、征服の勇者は来る」。

馬車とオーモンド・ホテルの窓との間を、いまだ征服されざる勇者のブルームは用心しいしい通っていった。あの男に見つかるかも知れないぞ。あの席に彼が坐っていたんだ、まだぬくもりが残っている。用心深い黒の雄猫よろしく彼はリッチ・グールディング（「スタ・デイ」の義、第5の伯父、第三種試験照）が挨拶代りに高くさしあげた法律関係の書類入り鞆のほうへ歩いていった。

——「されど、われはなれと……」

——君（「レネハン」参照）がこのへんにいると聞いたんでね、とブレイジズ・ボイランはいった。

彼は金髪のみス・ケネデイに敬意を表して、はすにかぶった表裏帽子「174」のふちに軽く指をふれた。彼女は彼にほほえみ返した。しかし相棒のブロンズは男の注意をひくために、自慢の豊かな髪と薔薇の花「167」をつけた胸とを誇らしげにみせつけて、相棒を凌ぐ微笑をおくった。

いきなボイランは、前もって飲み物の希望をきいた。

——君はなにを飲むんだい？ ビタ・ビール（「ホップを多量に含んだ」苦味のあるビール「説」）かい？ では、ビタ・ビールと、それから僕にはスロー・ジン（「りんぼく入り」の「ジン酒」歌）をくれ。競馬のことはもう入電したかい？

「まだだ。モリは四時に「174」。たしかにモリがいったのだ。」

〔副〕公安官の役所〔アバ・オーモンド〕の入口にカウリ〔聖職者くずれ。高利貸に苦しめ〕の赤い耳と出張った喉仏とが見える。見つからないようにしよう。グールディングに会うとは天の助けだ。あの男はオーモンド・ホテル〔161のオーモンド。〕で何をしているんだらう？ 馬車を待たせて。とにかく待とう。

やあ。どこへ？ 食事かい？ わしもちようど。ここにしましょう。ああ、オーモンドか？ ダブリン一の割安の店〔句・訳文〕です。そうかね？ ダイニング・ルーム〔173〕。あそこでじっとしていよう。相手に見られないで見える。では、お

伴しましようか。さあ。リッチが先にたつた。ブルームは鞆のうしろから付いていった。王族にふさわしい正餐〔句・訳文〕。ミス・ダウスはフラスコ型の大きな壺を取ろうと、背のびをしてサテン〔169〕の腕を伸ばした、胸がはち切れそうになるぐらい高く高く腕を伸ばした。

——おっ！ おっ！ とレネハンが彼女が体を伸ばすごとに息をはずませながら、甲高い声で叫んだ。おっ！
しかし彼女はやすやすと目指す獲物をとらえて、意気揚々と下した。

——もう少しのびてくれるとね、とブレイジズ・ボイランがいった。

彼女ブロンズは壺を傾けて濃いシロップ状のジンを彼の飲むみだけ注ぎわけながら、ボイランのほうを見た（あの上着の花。誰の贈りものかしら？）、そしてシロップみたいにねっとりとして答えた。

——*山椒は小粒でもびりりと辛い、のよ。

、つまり自分のことさ。手際よく彼女は少しづつシロップ状のスロー・ジンを注いだ。

——好運を折って乾盃！ とブレイジズはいった。

彼はひとつの大きな硬貨を投げだした。硬貨はかちんと音をたてた〔158〕。

——待った、とレネハンがいった、僕が……

——好運を祈って乾盃！ と彼は泡立つビールを高くあげていった。

——セプタ号の楽勝だよ、とレネハンはいった。

——僕はちよつと無謀だったよ、とボイランはグラスを傾け、相手に眼くばせしながらいった。自分で賭けたんじゃないんだよ。彼女の思いつきなんだ。

レネハンはそれには答えないで飲みつづけ、にやにやしながら、傾けたグラスのビールを、またミス・ダウスの唇をなめた。その唇はなかが開かれて、先に声をふるわせてうたった海の歌を鼻歌で低く口ずさんでいた。

アイ「ドロウリス。東海。」〔170〕

掛時計はジーと鳴った。ミス・ケネディは茶盆を両手でもって、彼らの前を（あの花、誰の贈りものかしら）通っていった。時計がボーンと鳴った〔158〕。

ミス・ダウスはボイランが投げた硬貨を手にとり、金銭登録器を強くたたいた。それはガチャンと鳴った。時計はボーンと鳴った。

* エジプトの佳人は鼻歌まじりに、引出しの中の小銭をがちやがちやよりわけて、おつりを渡した。「西の方を望み」。ボーン。「われを待て」。

——今のは何時だい？ とブレイジズ・ボイランは訊ねた。四時かい？
時刻。

鼻歌をうたっている彼女を、鼻歌をうたって振動している胸を目を細めて見るように見ていたレネハンは、ブレイジズ・ボイランの袖の肘のあたりをぐいと引いた。

——例の時計の歌を聞かしてもらおうじゃないか、と彼はいった。

グールドイング・コリス・ウオード法律事務所の靴〔176〕は、ライ麦の花〔170〕を飾ってあるテーブルの間を通過してブルームを導いた。ぶらっと彼は入ってきて、何処にしようかと迷ったが、その間禿頭のパット〔173〕は待ち構え、やつとドアの近くのテーブルを選んだ。近くにいることだ。四時に。忘れたのかな？ あれが手なんだろう。待たされるとよけい燃えるからな。僕にはできそうもない。とにかく待とう〔177〕、待つんだ。給仕のパットもとにかく待った。

きらめくブロンズの青い眼が、青色に燃えるポイランの眼と空いるの蝶ネクタイとに流し目をおくった。

——さあ、やれよ、とレネハンはせきたてた。誰もいやしないよ。このひとはまだ一度も聞いたことがないんだ。

——「……フロラの唇にふり注ぐ。」

高く澄んだ音がひとつ、最高音部で、ひときわ高く鳴りひびいた。

ブロンズダウスは波うつ薔薇の花〔176〕のリズムに合わせて、ブレイジズ・ポイランの花〔177〕と眼を求めた。

——たのむ、ひとつたのむ。

繰り返される告白〔158〕のメロディーにのって、彼は強く求めた。

——「いかでなれと別れえん〔同上〕……」

——もうちよつと後刻にね、とミス・ダウスは恥かしそうに約束した。

——いや、いますぐだよ、とレネハンはせき立てた。鐘を鳴らせ〔同上〕！ さあ、やれよ！ 誰もいやしないよ。

彼女はちらっと目をやった。いまのうちに。ミス・ケネには聞こえっこない。さつと身をかがめる。ふたつのほてった顔が、彼女がかがむのを見まもった。

いくつもの和音がふるえながら、主題のメロディーからさ迷い出て、さ迷える和音としてまたもとのメロディーに和し、それからまた見失い、ためらいがちにふたたび主題に和した。

——さあ、やれよ！ さあ！ 鳴らせ！

ちよつと身をかがめて、彼女は膝の上のところ、スカートとガーターとを山がたにつまみあげた。ちよつと待たせた。いたずらつぽい目つきでなおもふたりをじらした、身をかがめ、ガーターをつまみあげたまま。

——鳴らせ！

パチッ〔同上〕。彼女はひっぱった弾力のあるガーターを、暖色のストッキングをはいた。パチッと鳴らし甲斐のある女の腿がパチッ〔同上〕とほてるぐらいに反撥力〔同上参照〕をきかせて、とつぜん放した。

——鐘を！ と夢中になってレネハンは叫んだ。持主が覚えさせた芸だ。人形の肉体なんかじゃないぞ。

彼女は見くだしたように皮肉な微笑を浮べた（まあ、あきれた！ 男って〔162〕、しかし明るい方へすると歩きながら、ボイランには愛想よくあいそ笑いをした。

——あんたたちってお下劣の典型ね、と彼女はするすると歩きながらいった。

ボイランは相手の女をまじまじと見た。ぶ厚い唇に聖杯をさっと当て、その小さい聖杯をひといきに飲みほしてから、最後の葷色の濃いシロップ状〔177〕の点滴をすすった。彼の魅せられた眼は、彼女の頭がバーの飾り鏡〔169〕のわきをするすると動いていくのを追いに追っていった、金文字入りのアーチ型の鏡の中にはジンジャー・エールとライン白葡萄酒とボルドー赤葡萄酒のそれぞれのグラスがちらちら光り、いっばい棘のある貝殻がひとつ光っていた〔164〕が、そのわきを鏡にうつったブロンズが鏡の外の明るいブロンズといっしょに動いた。

そう、ブロンズは近くから自分の姿を。

——「……恋人よ、さらば！」〔158〕

——僕はいくよ、とじりじりボイラン〔173〕はいった。

彼は聖杯をさっと押しやって、おつり〔178〕を鷲掴みにした。

——ちよつと待つてくれよ、とレネハンは大急ぎで飲みながら頼んだ。まだ君に話したいことがあったんだ。じつはトム・ロッチフオードが……

——そんな話はよせ、とブレイジズ・ボイランはいつて、歩きだした。

レネハンもごくりと飲みほして、あとを追った。

——息子がいうことをきかなくなったのかい？ と彼はいつた。待つてくれよ。僕もいくから。

彼はせわしなくきゅつきゅつ鳴る靴〔176〕のあとから付いていつたが、入口のそばです早くわきに寄つて、ふたりのひと影、肥つたのと痩せたのとの挨拶した。

——今日は、ミスタ・ドラド。

——えつ？ ああ、こんにちは、こんにちは、とベン・ドラドのバス声が、ちよつとの間カウリ〔177〕じいさんの泣きごとを聞くのをやめて、うわの空で答えた。ボブ、もうお前さんを困らせるようなことはできはしないよ。アルフ・バーガン〔副保安官ジョン・ファニングの補佐。ジョイス家の古くからの友人。訳〕〕があなのつぽ〔副保安官のつぽのジ。ジョン・ファニング〕に話してくれるだろうから。今度こそあのイスカリオテのユダ〔「ヨハネ」6―7。高利貸〕をいたい目にあわせてやるよ。

ミスタ・デイーダラスは溜息をつきながら、指で臉をこすりこすり〔曲に感動して訳〕社交室〔174〕から出てきた。

——へへ、見てろつてんだ、とベン・ドラドはヨーデル式に裏声をきかせて陽気にいつた。さあ、サイモン。一曲うたつてくれよ。ピアノは聴かしてもらつたからな。

氣づかい顔の〔173〕給仕、禿頭のパット〔179〕は酒の注文を待つていつた。リッチ〔176〕にはパウア・ウィスキー〔D市南岸、トマス・ストリートの一面に工場のある。ジョン・P・父子会社の製品。訳〕。さて、ブルームは？ えーつと。この男に二度足を運ばせないようにしなくちゃ。魚の目がで

きているらしい。もう四時だ〔179〕。黒服は暑いな。もちろん少しは神経のせいも。熱を屈折する（これでよかつたかな？）えーっと。林檎酒。そうだ、林檎酒一本。

——なんの、なんの、とミスタ・ディーダラスはいった。即興的に弾いていただけさ、お前さん。

——さあ、やってくれよ、とベン・ドラドは要求した。『悶えよ、去れ』。ポブ、来いよ。

彼、でっかいだぶだぶのズボンをはいたドラドは、みなの前をのそりのそりと大股に歩いて（をはいたそいつを掴まえろ、よし、そんなら掴まえてみる）社交室に入っていた。彼、丸椅子の上に、ドラドはどしんと坐った。彼の中風病みみたいなの不恰好な両手はどしんとキーをうった。どしんと叩いてさっと手を放した。

禿頭のパットはダイニング・ルーム〔177〕の入口で、お茶を客に出してもどつてくるゴールド〔178参照〕に出会った。気づかい顔の彼は、パウア・ウイスキーと林檎酒を頼んだ。ブロンズは窓際に立ってじっと見つめていた、ブロンズが遠くから〔180参照〕。

二輪馬車は足なみ軽く〔175〕、チン、チンと走っていった。

ブルームはチャリという小さな音を聞いた。出かけるところだ。軽くこみ上げてくる吐息を、ブルームは花瓶のもの言わぬブルーの花〔179〕に洩らした。足なみ軽くチャリン、チャリン〔175〕。彼は行ってしまった。チャリン、チャリン〔159〕。

あの音。

——ベン、『恋と戦』をやれよ、とミスタ・ディーダラスはいった。昔はよかつたな。

まぶしい陽なたで人目もはばからず見送っていたミス・ダウスの瞳は、顧みられないままに半目隠し〔161〕からそらされた。行ってしまった。うち沈んで（誰にもわかりやしないわ）、まぶしくなって（まぶしい日光）、彼女は紐をすべらせて板すだれを下した。彼女がうち沈んで（なぜあのひとはあたしに構わずにあんなに急いで行ってしまったのかしら？）板すだ

れをおろすにつれて、そのブロonzの頭のまわりや、禿頭と相棒のゴールドとが並んで、絶妙でないコントラスト、絶妙でない非絶妙なコントラスト〔164参照〕をなして立っているバー〔176〕全体に、涼しく鈍い海緑色の濃い影がゆっくり拡がっていった〔1—160参照〕、ナイル・グリーン〔161〕に。

——— あるいは例の晩は、ピアノの伴奏者は可哀そうな老グッドウイン〔アル中のピアノ〕だったな、とカウリじいさん〔181〕が思い出ばなしを持ちだした。彼とコラドのグランド・ピアノとの仲はどうもしっくりいかなかったね。

いかなかった。

——— 連弾の独演会だった、とミスタ・デイダラスはいった。ああなると処置なしだ。酔いがまわりはじめると、あのじいさん何をやり出すかわからないんだよ。

——— なあ、おぼえてるかい？ とベン・だぶだぶ〔182〕ドラドはこっぴどく痛めつけた鍵盤の方から向き直っていった。情けないことに、俺は俺で婚^{*}礼服がなくてね。

彼らは三人とも笑った。彼は婚^{*}礼服がなかった。三人組の全員が笑った。婚^{*}礼服がなくて。

——— あの晩は、例のブルームのお蔭でたすかったんだ、とミスタ・デイダラスはいった。それはそうと、わしのパイプ〔172〕はどこへいったのかな？

彼はさ迷える和音〔179〕のパイプを取りに、ぶらりとバーへかえって行った。禿頭のパット〔181〕は、リッチとポウルデイ〔B〕のふたりの食事客に、飲みもの〔181→182参照〕を運んでいった。またもカウリじいさんは笑った。

——— わしのお蔭で急場がしのげたんだよな、ベン。

——— まったくその通りだ、とベン・ドラドは同意した。俺もあのきゆうくつなズボンのことは忘れられないよ。ボブ、あれはまったくみごとな助け舟だったよ。

カウリじいさんは紫がかつたみごとな耳たぶ〔177〕まで赤くした。彼のおかげで急場がしのげ。きゆうくつなズボ。みごとな助け。

——あの男の暮しがつちもさつちもいなくなっていることを、わしは知っていたんだ、と彼はいつた。細君は土曜日ごとにコフィ・パレスでピアノを弾いて、雀の涙ほどの心付けをもらっていたんだ、そして誰だったか、彼女がほかにも闇で商売をやっていると教えてくれたものがいた。憶えてるかい？ わしたちは彼女の家を探してホリス・ストリート〔D市南心部のメリオン広場から北へ入る通り。そこに第一四挿話の舞台である国立産院がある。〔訳〕〕を端から端まで歩きまわったあげく、キョウの店の小僧に番地を教えてもらったんだ。憶えてるだらう？

ベンは思い出した、彼の広い顔に驚嘆の表情が浮んだ。

——いや驚いたね、贅沢な観劇用マントがいくつかあつたし、ほかにもいろんな衣裳をもっていたね。

ミスタ・デイダラスはパイプを手にもってぶらりと戻ってきた。

——メリオン広場通りスタイルというやつだ。いやまったく、舞踏服だの宮廷礼服ばかりだね。それなのに奴はびた一文とろうとしないんだ。ほんとに。三角帽〔広い鑷が上方に折れ曲つた。一八世紀の正装用帽子〕だのポレロ〔女性用短〔上表〕〕だの半ズボン〔一六と七世紀使用の、太腿までの長さで詰め物でふくらませた袋状の短ズボン〕だの、掃いて捨てるほど持っていたんだぜ。ほんとに。

——さよう、さよう、とミスタ・デイダラスはうなずいた。ミセス・メアリアン・ブルームの遺品には古風な衣裳が各種そろっています、つてわけだ。

二輪馬車は足なみ軽く〔182〕河岸通りを走つていった。ブレイジズ・ボイランははずむタイヤ〔174参照〕にあわせて激しく揺れた。

ベーコンつき肝臓。腎臓。パイつきステーキ〔家畜や家禽の臓物はBの好物〕。はい、かしこまりました。かしこまりました、パット

が。

ミセス・メアリアン。尖ったホースの彼に会った〔メテンブシコウンス（輪廻）を聞き。焦げくさい臭いがするわ。ポール・ド・コ
「連えたMなりの発音と意味」〔訳〕〕。陰茎コックの名前が気に〔以上第四挿話でのM
の言葉の断片〔訳〕〕。

——彼女の名前は、彼女なんといつたっけ？ 丸ぼちやな小娘のころの。メアリアン……

——トウイーデイだ。

——そうそう。まだ生きてるのかい？

——生きてるところか、ぴんぴんしてるよ。

——彼女はむかし父親の……

——『連隊*の娘』。

——そのとおりだ。いまでもあの老いぼれの楽長*を憶えてるよ。

——ミスタ・デイダラスはマツチをしゅつとすつて火をつけ、香りのよい煙草をぶかぶか吸った。

——彼女はアイルランド人かい？ わしはほんとに知らないんだ。サイモン、そうなのかい？

——つよく、ぶかぶかと、きつい香りのよい、ばちばち音をたてる煙草を。

——頬の筋肉が……どうだね？……すこしいうことを利かなくなった……おお、そうだと……「わし*のアイランド娘

モリ、おお」さ。

——彼は鼻をさす羽毛状の煙をぶつと吹いた。

——ジブラルタルの岩山から……はるばる。

——女たちは深海の影〔183〕のなかで思い思らっていた、ゴールドはビールポンプの前で、ブロンズはマラスキ酒〔マラスカ、野性
さくらんぼ〕の

果汁（蒸）のそばで、ふたりとも思いに沈んで。ドラムコンドラ〔D市北岸。北部郊〕のリズモア・テラス〔ドラムコンドラ橋からグラスネヴィン留酒（訳）の東寄り〕の四号のマイナ・ケネディと女王アイドロウリス〔170〕、沈黙のドロウリス〔178〕とが。

パット〔184〕はふたをとって料理をさし出した。リアポールドは肝臓をうすく切った。すでに述べられたように、彼は好物のぞうもつ、木の実で味つけをした鳥の砂囊、フライにした鱈卵（たらこ）をうまそうに食べ、そしてコリス・ウオード法律事務所〔179〕のリッチ・グールディングのほうは、腎臓パイをそえたステーキ〔184〕を食べた、まずステーキを、つぎに腎臓パイを、ひとかじりひとかじり彼はパイを食べた、ブルームは食べた、ふたりは食べた。

ブルームはグールディングと結ばれて黙々と食べた。王族にふさわしい正餐〔177〕。

パチエラズ・ウオーク〔リフ川北岸の河岸通り。オウコネル橋でオウコネル・ストリートと交差。〕を独身者のブレイジズ・ポイランは、ゆられながら足なみ軽く〔184〕、チャリン、チャリンと〔182〕進んでいった、陽ざかりの中を発情して、鞭音軽く、はずむタイヤ〔184〕に合せて、跑足（だく）で去っていく牝馬のつやつやした臀部、はげしく揺れ、ぬくもった席〔176参照〕に坐りながら、ポイランじりじり〔173参照〕が燃えにもえて大胆に。息子が。いうことをきかないのかい〔181参照〕？ 息子が。いうことをきかないのかい？ む、む、息子が〔159〕。

ドラドのバスーン声〔181参照〕のアタックがみな声を押し、ひびくピアノの轟音を掻き消してとどろきわたった〔159参照〕。

——「わが想い恋に燃ゆるとき〔159〕……」

とどろくベン想いベンジャミンの声は天井にまでとどろき、明り窓のガラスがわななき恋にふるえた。

——戦いだ！ 戦いだよ〔同上〕！ と、かウ、じいさん〔183〕は叫んだ。君は戦士なんだぜ。

——そのとおりで、とベン戦士は笑った。僕は君の家主〔師（C・ラヴ）の（訳）〕のことを考えていたんだ。恋が勝つか、金〔ルーベン・J.〕

が勝つかだ。

彼はやめた。彼は大きな顎ひげを、大きな顔をゆすぶった、自分の大きな失敗「戦いでなく恋のこと」を笑いながら。

——おい、お前さんはきつと彼女の鼓膜「159」を破つちまうぜ、とミスタ・ディーダラスは煙草のかぐわしい香りをとおしていった、そんな勢いではな。

顎ひげまでも飛びそうな、とほうもない大笑いにドラドの巨体は鍵盤のうえで揺れた。俺はきつと。

——もうひとつの膜のほうはいうまでもないが、とカウリじいさんはいそえた。ちよつと休めよ、ベン。情をこめて、だが控えめに、だよ。こんどは俺にやらせてくれ。

ミス・ケネディがふたりの紳士に冷たいスタウトのジョッキを運んできた。彼女は軽くお愛想をいった。ほんとうに、いい天気だね、と第一の紳士がいった。彼らは冷たいスタウトを飲んだ。総督閣下がどこへお出かけになったか知ってますか？ たしかに、鋼蹄のひびき、蹄の音が鳴りひびくのは聞いたんだけど「161参照」。いいえ、どこだか知らないんです。でも新聞に出ているはずですよ。いや、それにはおよばないよ。なんでもないことですよ。彼女は『インディペンデント』紙のページを右に左に波うたせてめくり、総督閣下を探しながら、髪をいく重にも巻きあげた頭「167参照」をゆっくり揺りうごかした、総督閣を。どうも手数をかけて、と第一の紳士がいった。あら、どういたしまして。こつちを見ていたあのひとの目つきったら「162参照」。総督閣下。ゴールドとブロンズとがならんで鋼鉄の音をきいていた「161参照」。

——「……恋に燃ゆるとき

われ明日を思いわずらわず」

ブルームはマッシュポテトに肝臓の肉汁「161」をかけて、こねくり回した。『恋と戦』「182」を誰かが。ベン・ドラドのあのすばらしい。あの晩、彼は例のコンサートに出演するために、僕のところへ夜会服を借りにかけこんできた「184参照」。ズボン

が脚に「太鼓^{*}の皮みたいにびったり」張りついていて「183参照」。音楽好きの豚たち。彼が出ていったあとで、モリが笑ったのなんのって。ベッドにあおむけにひっくり返って、きやあきやあ、ばたばた。あのひとつたら、お道具がみんなまる見えなんだもの。あらあら、汗びっしょりだわ！ かぶりつきのご婦人たちがあれを見たら、きつと！ ああ、あたしこんなに笑ったことないわ！ だが、もちろん、あの道具のおかげで低音の樽声が出るのだ。宦官^{かんがん}が逆のいい例だ。誰が奏いてるんだろう？ みごとなタッチ。カウリにちがいない。音楽を知っている。どんなピアノの音でも聞いただけですぐわかる。だが、可哀そうに彼は口が臭い。やめてしまった。

ミス・ダウス〔182〕はしなをつくつて、リディア・ダウスは入ってきた愛想のよい事務弁護士、紳士のジョージ・リドウエル〔170〕におじぎをした。ようこそ。求められるままに（淑女よろしく〔176参照〕）さし出した潤いのある手を彼は固く握った。やあ。ええ、帰ってきました〔休憩から。参照〔訳〕〕。またいつもの退屈な仕事に。

——ミスタ・リドウエル、お友だちが奥にいらつしやいますわ。

愛想のよい事務弁のジョージ・リドウエルは、こちらの求めに応じて淑よろしくさし出されたりリディアの手を握りつづけた。

チャリン、チャリン〔186〕。

ブルームはすでに述べられたように〔186〕、肝を食べた。少なくともここは清潔だ。あのバートン食堂〔D市兩岸のショッピング街グラフトン・ストリートから東に入る、デューク・ストリート一八号、B・ホテルの軽食堂〔訳〕〕で、柔らかくなるまで軟骨と格闘していたあの男。ここには誰もいない、グールディングと僕だけ。きれいなテーブル、花〔182〕、司教冠の形にたまたまれたナプキン。パットはあっちへ行ったりこっちへ来たり。禿頭のパット〔183〕。手持ちぶさた。ダブリン一の割安の〔177〕。

またピアノ。あれはカウリだ。彼がピアノにむかって腰をかけている様子、一心同体で、たがいに理解しあっている。弓

の先をにらみつけて、バイオリンをひっ掻いたり、チェロを鋸みたいにひくうるさい削り屋たち、あれをきいてると歯がいたくなる。甲高くしてしつこい、彼女のいびきみたいだ。あの晩、ふたりはボックス席にいた。幕間ごとに、下でトロンボーンが鯁しやちみたいに唸り、別の金管楽器の男は、ねじをはずして溜った唾を抜いていた。指揮者の脚も、だぶだぶズボンの中でジグ、ジグ踊りをしていた。あんな脚はかくしたほうがいい。

ジグ踊りをしながら、二輪馬車が足なみ軽く、足なみ軽く〔184〕。

ハーブだけだ。優美だったのは、弦の上に金色の散光。少女が奏いていた。優美な船尾みたい。このグレイビーはまああける、王族にふさわ〔186〕。金色の船。*エリン〔172〕。*かつて一度、あるいはふたたび鳴りひびきしハーブ。鮮かな手つき〔Mの「ひんやりした、気持ちのいい手」〔第八挿話参照〕を連想〔記〕〕。ホウズの丘、しゃくなげ〔第八挿話参照〕。男はみんな女のハーブだ。僕も。彼も。年輩の男も。若い男も。

——いや、わしはだめだよ、とミスタ・デイダラスは尻ごみしながら、気のりのしない様子でいった。
強く。

——さ、やれよ、つべこべいうな、とベン・ドラドはがなりたてた。断片的にでもいいから歌えよ。

——サイモン。「マッパリ」をやってくれ、とカウリじいさん〔186〕はいった。

彼はステージの前方へ大股に数歩すすみでた、きまじめな顔をして、苦境〔181参照〕にもめげず、長い両腕をひろげて。彼ののどほとけ〔177〕はしゃがれた声でやさしく歌った。やさしく彼は壁にかかっている埃まみれの海の絵にむかつて歌った、『最後の別れ』にむかつて。とある岬、いっせうの船、大波に見えがくれする沖合の帆。さようなら。ひとりの愛らしい娘、岬に吹く風、彼女のまわりに吹く風にヴェールをなびかせて〔159参照〕。

カウリがうたった。

「かくも恋したい、」

アップリ、ワット・アモレ、
ル・ミキオ・スワルド・リンコントウ
わが目なれをおいもとめ……」

娘はカウリの歌声に耳をかたむけずに、別れゆくひとに、愛するひとに、風に、恋に、消えてゆく帆に、帰りきたれと、ヴェールをふつていた。

——さ、やれよ、サイモン。

——ベン、なにしろ、わしの全盛時代は過ぎたんでね〔一六世紀後半に始まる
イギリスの謠歌〕……だが、まあ……

ミスタ・デーダラスはパイプ〔183〕を音叉〔174〕のそばに置き、椅子に腰をおろして従順なキーをたたいてみた。

——サイモン、ちがうよ、といって、カウリじいさんはふり向いた。原曲のとおりにひいてくれよ。変記号ひとつだよ。

キーは従順に音程を高め、物語り、いい違え、ろうばいしながら奏き手のまずさを暴露した。

ステージのおくにむかつてカウリじいさんは大股に歩いていった。

——さあ、サイモン。俺が伴奏しよう、と彼はいった。立てよ。

グレイアム・レモン〔D市北岸、ロウア・オウコヌル・ストリート四
九号。王室用甘味糖菓製造。卸売商人〔訳〕〕のパイナップル香味料入り棒飴の前を、象屋エルヴエリ商会〔ロウア
ル・ストリート四六七号。防水布、
防水服製造業〕・W・E・経営の前の、二輪馬車〔189〕はのろろ走っていった。

ステーキ、腎臓、肝臓〔186〕、マッシュユ〔187〕の王族にふさわしい〔186〕料理を前に、王族のブルームとグールディングが坐っていた。料理を前に王族のかれらは、パウア・ウイスキー〔181〕と林檎酒〔182〕のグラスをあげて乾杯した。

いままでのテノールの曲のうちで一番みごとなものだ、あの『夢遊病の女』*は、とリッチはいった。彼はいつかの晩、ジ*ョー・マーズがそれを歌うのをきいたことがある。そういえば、マクガッキン*もたいしたものだった！ まったくね。彼も彼なりに。聖歌隊式の歌いかただが。マーズこそほんとうの歌い手だった。ミサ*待者*っていうわけだ。リリカル・テナーと

いつてもいい。とても忘れられないね。とても。

肝臓をたいらげたあとのベーコン〔184〕から眼をあげて、ブルームは気の毒そうに、顔面がひきつって歪むのを見まもつた。腰が痛いのだ、この男。ブライイト病患者のきらきら光る目。彼の次の出しもの。それは自業自得だ。この病気には丸薬もある、パン屑を固めたような代物、一箱一ギニ〔二シリン〕もする。いくらか持ち直すだけだ。あれで歌もうたう、『墓場へゆけ』。彼にはうってつけた。腎臓、パイ〔186〕を食べている。「美しい花を美しい（ひとに）」「「ハムレット」51の二六六行。腎臓の悪い男が腎臓パイを食べていることとから」あんな薬はあまり効かない。ダブリン一の〔188〕。いかにもこの男らしい。パウア・ウイスキーを飲む。酒のことではうるさい。グラスに瑕があるだの、新しい水に替えてくれだの。儉約のためにカウンターからマツチをくすねたりする。そのくせ一方では、くだらないものに平気で大金を使う。そうかと思うと、寄付を求められてもびた一文出さない。酔ったときに、馬車代を払うのを拒んだことがある。おかしな連中だ。

リッチはあの晩のことはぜつたい忘れない。生きてるかぎり、ぜつたいに。あのロイヤル座の天井桟敷で小男のピークといっしょに。そしてちょうど最初の調べが。

言葉がリッチの口もとでとぎれた。

こんどは大ぼらを吹こうとしている。どんなことにもかならず大言壮語する。自分で自分の嘘を信じている。ほんとに信じきっているんだ。尋常一様の嘘つきじゃない。だが記憶がよくないといけなない。

——あの曲は何ですか？ とリアポールド・ブルームはたずねた。

——「もうなにもかもおしまいだ」だよ。

リッチは唇をとがらせた。低い調べが、女の妖精の妖しい泣き声がもれ始めた。「もうなにもかも」。つぐみ。うたつぐみ。小鳥のようなあえかな彼の呼気が自慢のきれいな歯の間から、フルートの音を思わせる嘆きの調べを響かせた〔189〕。

「おしまいだ」。含みのある音。この男の口笛の音にはふたつの違った音色がこめられている。さんざしの咲き乱れる谷間あひで聞いた黒どりの鳴き声。僕のいくつかのモチーフを借りてひとつに撚りあわせ、変奏した「Bの口笛に答」。「なにもかも」*新しい歌が「なにもかもおしまい」「同上」になつてしまふ。こだま。「答える声のいと美わしき」。どうしてあんなことができるのだろうか。「もうなにもかもおしまいだ」「同上」。悲しげな口笛の音。没落し、降服して、「おしまいだ」。

ブルームはいかにもリアポウルドらしく耳を傾けた、花瓶のしたの折れ曲つた花瓶敷きの縁へりをのびしながら。整頓。そうだ、思い出したぞ。美しい曲だ。彼女*は眠つたままで伯爵のところへ赴いたのだ。月光を浴びた無実の乙女。じっさいだ。ああいうひとびとは自分たちの犯す危険を知らない。だが、彼女をひき止めなければならぬ。名前*を呼ぶ。手に水をかけ〔眼をさまませ〕。「一輪馬車、足なみ軽く〔189〕」。もう手おくれ。彼女はどうしても行きたかつたのだ。それが理由さ。女の性さが。潮の流れを止めようとするようなもの。そうだと、「なにもかもおしまいだ」。

——すばらしい曲ですね、とリアポウルド、「おしまい」になつたブルームがいつた。よく知っている曲です。

これまででぜつたいに、リッチ・グールディングは。

この男もよく知っている。いや、曲想をよくつかんでいる。「まだ娘のことばかり話している」〔『ハムレット』2―1の188〕。〔九行。ポロニアスの独白〕。*
本当の父親を知っているのは賢い娘だ、とディーダラスがいつていた。僕の場合はどうだ？

第三挿話——その一 正誤表

頁	行	誤	正
一一四	四	〔D市、南岸、アイアリツシユ・タウン……〕	〔D市南岸、アイアリツシユタウン……〕
一一五	一二	砂の城	砂のお城
	一六	城	お城
一一七	一	だが、ガーティとは誰のことだったのか？ の思いに耽り…… も	だが、ガーティとは誰のことだったのか？ もの思いに耽り……
	二	イ、マクダウエル……	
	一六	いかにも優美に	いかにも艶麗に
一二八	九	それまでは彼等はまったく……	それまではまったく……
一三三	四	見せびから	見せびら
一四〇	一	外国 <small>まっくに</small>	外国 <small>とらくに</small>

一四二	一七	そり返ったために……	そり返ったために……
一四三	三	覗つづけた……	覗つづけた……
一四五	八	〔50—51参照〕	〔142—143参照〕
一四八	一四	あたしの変人よ……	あたしの恋人よ……
一五〇	四	一緒にあそこにいる。	一緒にあそこにいる。
一五一	一二	鐘台	鏡台
	一四	〔……取れないこともないが、53、56その他……〕	〔……取れないこともないが、145、148その他……〕
一五三	三	楽な仕事じゃない。	楽な仕事じゃない。
一五六	六	その中の液の僅かな量が……	その中の僅かな液が……
一五八	一三	手足が大きくして丈夫で……	手足が大きくて丈夫で……
一六〇	一三	〔……39の割注参照〔訳〕〕	〔……131の割注参照〔訳〕〕

一六一	一五	どこの港にも……	どこの港にも……*
一六二	一六	石南花 <small>しやくなげ</small>	石南花 <small>しやくなげ</small>
	一七	……て、羊齒……	……て、羊齒……
一六四	一三	あの連中は……	連中は……
一六六	一四	〔147参照〕	〔145参照〕
一六七	一五	〔119〕	〔119参照〕
一七三	一一	旻天旻天	旻天旻天